

## (2) 不育診療科

### 概要、特色

- (a) 不育症とは妊娠はしても流産を繰り返す場合であり、不妊症とは異なり近年新たに提唱された疾患概念である。流産自体の頻度は全妊娠の約 12～15%にみられ、それ自体決して少ないことではないが、2回～3回と流産を繰り返す場合は両親に何らかの原因が潜んでいる可能性が考えられる。現代の医学でその病因がすべて解明されているわけではなく、不育症自体は発展途上の分野であるともいえるが、当院においてはできるだけ最新の知見を取り入れて、現段階で可能な限り最善の治療手段を駆使して診療を行っている。
- (b) 当院では各診療科との綿密な連携により、妊娠成立から出産さらにはその後の育児までをサポートする包括的な診療が可能である。疾患によっては早産となり NICU 管理が必要となる症例も多いと考えられるが、産科ならびに新生児科との協力の下に集中的周産期管理が可能である。またこころの診療部や母性内科、婦人科などとの協力のもとに、患者の「こころ」のケアに関しても十分に配慮した診療を行っている。最近は社会心理的因子が免疫系や内分泌系と関わって妊娠の維持に重大な影響を及ぼしていることが指摘されており、妊娠後はもちろんのこと、妊娠前から専門医によるカウンセリングを定期的に行うことを一般臨床に取り入れている。

### 診療活動、研究活動

- (a) 専門診療科としては週 4 回の専門外来を有し、他にも婦人科、不妊診療科、産科、胎児診療科、母性内科などと協力し妊娠成立から分娩、育児までを専門的にサポートしている。開設以来 115 名（平成 15 年 3 月現在）の不育症初診患者があり、そのうち妊娠成立に至った患者は 40 名であり、現在のところ出産例は 6 例、妊娠継続中は 23 例、流産に至った症例は 11 例である。
- (b) 不育症患者に対して行われる原因検索は多岐にわたっており、検査項目も統一されたものがあるわけではない。現在一般検査として行っている諸検査を下記に示すが、そのなかで最小限で適切な診断項目を設定することを検討している。また治療面においてもその治療の是非や選択に関してコンセンサスの得られていないものも多いため、臨床研究の積み重ねにより不育症患者に対する診療体型を確立することを目指している。

#### 当センターにおける不育症一般検査と治療手段

1. 遺伝学的検査（夫婦染色体、流産胎児染色体検査）  
遺伝カウンセリング、羊水検査
2. 免疫学的検査（抗核抗体、抗カルジオリピン抗体 IgG・IgM、抗カルジオリピン-2GPI 抗体、NK 活性、ループスアンチコアグulant、APTT・PT、XII 因子など）  
抗凝固療法、免疫抑制剤など
3. 内分泌学的検査（F-T3、F-T4、TSH、プロラクチン）  
薬物療法
4. 黄体機能検査（プロゲステロン、エストラジオール）  
薬物療法、排卵誘発剤
5. 解剖学的検査（子宮卵管造影検査、子宮鏡）  
手術（経頸管の手術、開腹術）

### 研修

現在、母性内科主催の妊娠と免疫研究会に協力している。